

知識の社会史

ピーター・バーク著

著者はイギリスを代表する歴史家のひとり。その専門は、イタリア・ルネサンスからフランス革命の時代にいたる広義の文化史である。明晰で簡潔な文章を書くひとであるが、この本では「知識」なるものの歴史にまとめて絞った。しかも、ただでさえつかみどころのないこのテーマを社会史的に考えてみようというのだ。彼ほどの博識をもつてしなければ成功するはずのない試みである。その結果は大成功、とても面白い本となつた。

バークはまず、かつての知識社会学の取りだした問題点を整理しながら、「ルネサンスから啓蒙主義の時代」までのヨーロッパで「知識」なるものがどのような性格をもち、どのような社会関係の中にあったかを説明してみせる。大切なのは、彼のいう知識が学問や書物の世界のみには限定されないということだ。それが知識



知識の社会史

(井山弘幸・城戸淳訳、新曜社・三、四〇〇円)

▼著者は37年英國生まれ。ケンブリッジ大教授。著書に『イタリア・ルネサンスの文化と社会』など。

人なるものの専有物とはされていないことだ。それは地図の中にも、十八世紀に始まる国勢調査の記録の中にも、スパイの報告書の中にも、広告の中にも存在するのだとする。しかもそれが政府の文書館にも、図書館にもつまっているとする。

実際に面白いアイディアだ。しかし、これでは大風呂敷になりすぎで、メチャクチャになってしまいはしないだろうか——もちろんそこが著者の力量の見せどころ。バークは知識人のありよつ、知識の性格、その整理分類法（図書館や百科事典、大学のカリキュラムにからむ問題）といった明確な支柱をまず立てる。そこにおびただしい事実を書き込んでゆく。すっきりしていく、かつ豊富。

とくに第六章以降、知識を管理する国家と教会、それを売る市場と出版（知識財産、産業スパイ、証券取引などもからんでくる）、そして読者の役割を論じた後半が抜群に面白い。例えば、そこには身分証明書の話すら出てくる。一七七七年以降のフランスでは、「アメリカ出身の人びとは特別の身分証」の携行を求められたという話も。そして「知識の拡張は帝国の拡大の帰結であると同時に、その前提でもある」といった指摘も付け加わることとなる。